

つくば院生ネットワーク

—アカデミックな反乱をおこした院生たち—

筑波大学教育イニシアティブ機構
教授 野村 港二

大学で何を学ぶか

大学生が勉強しないと言われていますが、そもそも大学で学ぶべき事は何なのでしょう。専門の勉強や研究も答えではあります。しかし現実の課題は、専門家が分野を超えて協働することで解決されるものです。日本の大学に欠けているのは専門分野の勉強ではなくて、分野を超えて議論すること、物事の本質は何かを問い続けることなのではないでしょうか。これに気づいた大学院生たちの、アカデミックな反乱がはじまりました。

筑波大学の環境

私たちの筑波キャンパスには、あらゆる分野の専門家がいて、いつでも異分野との出会いが可能です。しかし、分野の壁は高くそびえていました。キャンパスが変わったのは、この数年のことです。分野を横断して取得する博士号、サイエンスとアートのコラボレーション、大学院生が真の教養をつけるための「大学院共通科目」、附属学校との新しい形の連携など、少しずつ壁に通り道ができました。

つくば院生ネットワーク

そして大学院生グループ「つくば院生ネットワーク」(TGN)が、昨年の学園祭での企画「院生によるプレゼンバトル」で動き始めます。院生が研究プレゼンを評価しあう予選を経て、本戦は学園祭で行います。この企画の大成功は、「模擬店祭」と揶揄されていた学園祭を学問の場に変え、分野を超えた対話という新しい文化につながります。

ストリートライブ

TGNが次に仕掛けたのが「Monday Morning Institute」, 講義が始まる8時40分までのセッシ

ョンです。月曜の朝8時、開館前の図書館に集まり、当番の演者の15分ほどの研究紹介に続き、コーヒー片手にディスカッションをします。私は敬意をこめてストリートサイエンティストと呼んでいますが、こんな研究者たちに会ったことがありますか？もちろん、彼らはバリバリ論文を書き学会で活躍しているプロですが、専門分野を超えて活発な議論を展開します。理論物理のプロがハワイ史のプロと軽妙ながら核心をついた議論をし、図書館情報学のプロが燃焼学のプロの火花を燃え上がさせます。この自由で濃密な議論こそ、大学は何をやるどころかという問いの答えではないでしょうか。新入生も現れます。入学と同時にディスカッションのシャワーを浴びた学生がどう育つか、ワクワクしています。



Monday Morning Instituteの様子

オーダーメイドの新設科目

TGNは、大学院の科目まで作ってしまいます。大学院共通科目副委員長だった私に、自分たちで科目を作りたいと言ってきました。前代未聞です。しかも、彼らが指名した教員にプレゼンバトルをさせるという過激な提案です。しかし拒む理由などありません。講義の目的や大枠から一歩ずつ、事務職員も交えて詰め、企画と運営はTGN、成績関係は教員である私、事務は関連する規則など細部を確認するなど役割分担も決めました。TGNの中心メンバーは、教壇に立つことができる学内資格を持っているので教える側で問題なし。最後は本番と同じ教室での「予行演習」で細部を調整するという緻密な準備を行いました。こうして全学の院生が受講できる「第一線研究者教員プ

レゼンバトル」が開講されました。大学院共通科目でも科目責任者の所属専攻が開設母体です。専門に偏りが無い事をアピールするため、彼らは学長と直談判をし筆頭責任者にしてしまいました。学長が大学院生と一緒に暴れ回っているようで愉快です。

「教員プレゼンバトル」の目的は、教員を戦わせることではありません。彼らにとって憧れの名プレゼンに接し、その学問的内容と発表方法について議論することで、院生のプレゼン能力や議論する力を高めるのが目的です。確かに、一般の受講生にはその効果があると思いますが、もともと能力の高い TGN メンバーは、名物教員からカリスマ性を盗み取るのが狙いだったのかなと、疑っていてもいます。してやられたのかも知れません。

実際の講義は、45分のセッションを単位に構成されています。教員は15分間で研究発表「研究プレゼン」を行います。続いて研究内容に対して学問的な質疑応答をする15分の「ディスカッション」。この講義では、すべての参加者を「さん」で呼ぶので、水平感覚の中で本質をついた徹底的な議論になります。そのあと、授業モードになって「種明かし」。ここでは、今のプレゼンにどんな仕掛けや工夫が隠されていたのかを教員が語り、質疑応答が行われます。この45分を3セッション行って一回の講義となります。全学から60名近い大学院生が受講登録をし、「モグリ歓迎」の看板につられて学部生も入ってきます。大学院生がものすごいエネルギーで勉強を始めました。おもしろい時代の子供がします。



教員プレゼンバトルの様子

おわりに

現代の科学は細分化され、「理科」も「物・化・生・地」と考えるのが常識です。教科間の関連も希薄で、「理科の勉強には国語の力が必要だ」と言う私は変人扱いされています。この原因の一つに、日本の理科がドイツの影響を受けていることが考えられます。ドイツには英語の Science と同じ広い概念を表す Wissenschaft と、専門分野ごとの体系を表す Fachwissenschaft という言葉があり、後者が日本語の「科学」の発想の基礎になっています。さらに日本では、発見にねがず科学と発明にねがず技術という異なる活動が同一視され、論理的には理解しがたい「科学技術」という言葉まで生まれてしまいました。理科と暮らしを結び付けた新学習指導要領の考え方も、分野を越えて考えるというよりは、科学を使って豊かに暮らそうという科学技術の発想の延長に見えます。それも必要ですが、私も含めて教壇に立つ立場の人間は、自分の教えていることが他の分野とどう関わっているのか、ひろい視野のなかで、どちらを向いて何を教えているのかを把握することが大切なのではないのでしょうか。例えば「物・化・生・地」が理科に含まれるのではなく、理科は「物・化・生・地」が有機的に連携していなければ成立しない哲学であるといった事を、今一度確認したいと考えています。反乱軍の院生たちは、この本質に我々より先に気づいたようです。

参考 URL

つくば院生ネットワーク

<http://tgn.official.jp/>

月曜朝のストリートサイエンス "Monday Morning Institute"

<http://tgn.official.jp/mmi/>

大学院共通科目の中の本科目

http://www.tsukuba.ac.jp/education/g-courses/detail.php?subject_id=346